

クマエビ



高知県で漁獲されるくるまえび類のうち、最も多く漁獲されているのはクマエビで、足が赤白色をしていることから、あしあかとも呼ばれます。くるまえび類の中ではウシエビと並んで大きくなる種で、大きい個体は全長 25 cm 近くになります (図 1)。また、種苗放流も行われています。

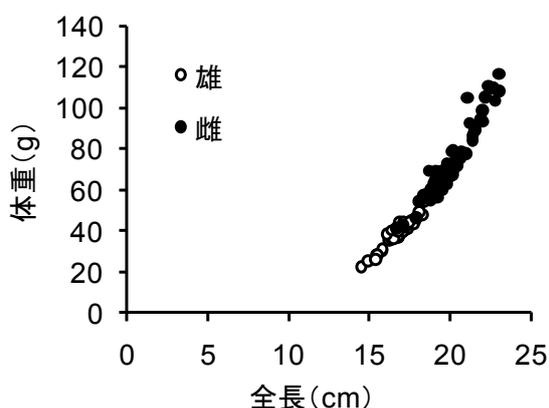


図 1 須崎市沖小型底びき網で 6 月前後に漁獲されたクマエビの全長と体重の関係。

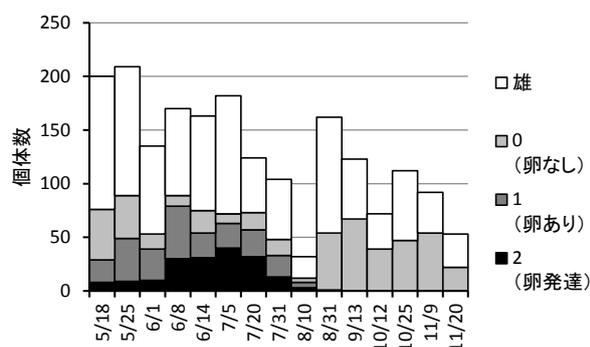


図 2 須崎市魚市場に水揚げされたクマエビの外部観察による成熟状況 (平成 24 年)。

生物特性

クマエビは雌の方が大きく (図 1)、腹面にある生殖器から判別できます。成熟個体は水深 50~70m の外海域で漁獲されることから、外海域が産卵場と考えられます。成熟した雌の親えびは背中に緑色の卵巣が発達するため、卵巣の発達具合を調べると、5 月には既に雌の成熟が確認できます (図 2)。その後、卵巣の発達した個体は 6~7 月に増え、産卵盛期を迎えます。8 月以降はほとんど成熟個体がいなくなることから、産卵期は 7 月までと考えられます。

クマエビ稚えび (写真右) は内湾域や河口域に出現することから、水深 50~70m の外洋域で生まれたクマエビはおよそ 1 か月の浮遊幼生期の間にごく浅い着底場所に移動し、加入すると考えられます。稚えびの出現場所は主に汽水性のコアマモ場に

限られており（図 3）、ウシエビと共に 9 月まで生息します（図 4）。

クマエビが生育場であるコアマモ場を出る大きさは全長 4 cm 前後で、成長しながら深場へ移動すると考えられますが、ほとんど採集事例がなく、生態はよくわかっていません。その後、クマエビは外海域の水深 30～60m で全長 10cm 前後から漁獲されるようになり、雌は主に全長 19 cm で成熟します（杉本・大河 2012）。

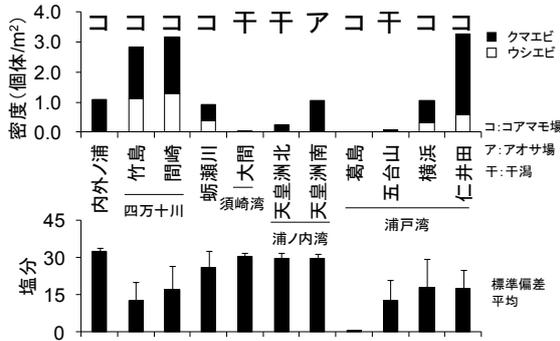


図 3 高知県の内湾域及び河川内で採集されたクマエビ及びウシエビの密度、底質及び塩分（平成 22～24 年）。

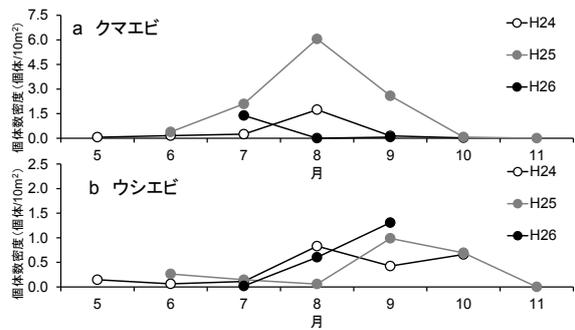


図 4 高知県の内湾域及び河川域で採集されたクマエビ及びウシエビ密度の推移（大河他 2016 を転載）。

県内の漁獲と資源動向

クマエビは、主に土佐湾沿岸の小型底びき網漁業で漁獲され、須崎市周辺漁場が主漁場になっています。前述のように、7 月までは産卵期で、大型個体が主に漁獲されますが、1 日 1 隻当たりの水揚げ個体数は 8 月に減少した後、9 月以降に増加します（図 5）。これは、10 cm 前後の小型個体が加入するため、成長しながら漁獲されます。この群は、次年度の休漁期が明ける 5 月以降に産卵群になると推察されます。

近年漁獲されるくるまえば類はほとんどがクマエビであることから、くるまえば類の漁獲量をクマエビの漁獲量として見ると、昭和 50 年代前半以降、減少傾向にあり（図 4）、資源水準は「低位」、動向は「減少」と判断されます。

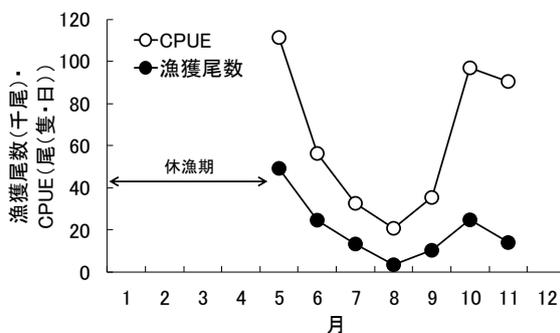


図 5 須崎魚市場に水揚げされたクマエビの漁獲効率（1 日 1 隻当たりの水揚げ個体数）。

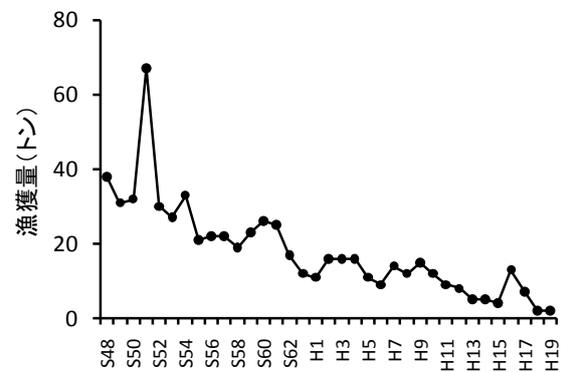


図 6 高知県のくるまえば類漁獲量（昭和 48 年～平成 19 年）。